

《書評》

朴徐玄 (Seo-Hyun Park) 著

『東アジアの国際関係における主権と地位』

*Sovereignty and Status in East Asian International Relations*  
(Cambridge: Cambridge University Press, 2017)

岡垣知子

朴徐玄 (Seo-Hyun Park) 氏の著作『東アジアの国際関係における主権と地位』は、東アジアの国際関係において階層性(ヒエラルキー)がいかに受容され、再生産されるかを理論的・実証的に分析した著作である。著者がコーネル大学に提出した博士論文を基に出版されたこの意欲的な著作は、階層性が東アジアの国際政治における持続的かつ強力な構造であるという前提に基づき、国家が主権の自律性を主張しながら階層秩序における自国の地位を模索することによって階層性が繰り返され、東アジアの永続的な特徴であり続けていることを、日本と朝鮮(韓国)のケースを用いて実証している。

この本はまず、階層秩序をパワーの非対称性と国家間の地位の差異についての認識に基づいた相互作用ととらえ、序章と第一章で、東アジアにおける階層性の社会的文脈について説明している。続く第二章から第六章においては、クロスセクショナルな分析と時系列分析を組み合わせ、前近代(第二章)から近代への移行期(第三章)、冷戦期(第

四、五章)、ポスト冷戦期(第六章)という、一九世紀以降の異なる歴史的文脈において、日本と朝鮮(一九五三年以降は韓国)が階層秩序における支配的国家に対して主権の自律性を主張した六つのケーススタディーを行っている。

第一章において、朴は、階層性が存続する理由についての理論的枠組みを提示する。階層秩序は、東アジアにおいて社会的に認知された事実であるため、政治指導者たちの行動や使用言語に意味を与える。そのため、支配を受ける側の国内政治上の正統性をめぐる政治指導者たちのレトリックによって、階層性がさらに制度化されるというのが朴の見解である。

第二章においては、伝統的な華夷秩序の下、徳川幕府下の日本が「鎖国」という形で、また李氏朝鮮が華夷秩序への「統合」という形で、中国の権威に対する国内政治上の正統性を確立していったことが描かれる。日本と李氏朝鮮の対中姿勢の相違を、朴は、地理的要因と文化・イデオロギー的要因、および国内政治要因に見ている。東アジア諸国がウエストファリアの主権原則をどう受け入れたかをテーマとする第三章では、正統性をめぐる国内政治に重きを置いた説明となっている。第四章以降は、戦後、中国に代わって東アジアの支配的国家となったアメリカに対して日本と韓国が主権の自律性を主張することで、東アジアにおける階層秩序がいかに再生産されてきたかを実証している。ここで取り上げられているのは、岸政権下の安保闘争(一九五九—一九六〇)、ニクソン政権の韓国駐留米軍削減に対する朴正熙の自主防衛政策(一九七一一七五)、鳩山政権下における普天間基地をめぐる問題(二〇〇九—二〇一〇)、二〇〇〇年代初頭の盧泰愚政権下においてイラク戦争をめぐる同盟関係が緊張したケースである。アメリカに対する自律性という言葉を政治指導者が用いるのは、日本でも韓国でもアメリカとの関係性こそが国内政治における正統性の源であるからであり、国内政治における正統性を獲得すると同時に、同盟関

係における自国の地位を再確立しようとすることで、東アジア地域の階層秩序が再生産されると、著者は繰り返して論じている。

関連文献をくまなく渉猟し、東アジアの国際関係理解のための新しい視点を提供している本書が、優秀な博士論文を基に執筆されたものであることは間違いない。実証研究として、六つのケースを緻密に扱っている点、史実を正確かつ客観的にとらえている点は特に評価されよう。問題はオントロジーであり、史実の解釈である。

著者は、東アジアにおける階層秩序を所与のものとしてとらえ、階層性が東アジアで社会的に認知されている永続的な特徴であると繰り返して述べる。しかし、階層性が東アジアにおいて共有された認識であり、国際政治の永続的かつ強力な構造であるという見方や、国家の行動原理が自己保存や安全保障ではなく国際社会における地位の向上(status-seeking)であるという見方はいったいどこからくるのであろうか?これら根本的な問題についての答えがないまま、階層性がいかに繰り返されるかに議論は集中している。

第一章において著者は既存の理論に対するカウンター・アーギュメントを行っているが、その対象はいずれも国際政治を階層的にとらえる他の理論(レイク、アイケンベリー、ジョンストン、ゴー)に向けてのものである。しかし、国際関係の通念は、水平的見方、つまり勢力均衡であり、一国が突出した状況は、伝統的国際政治の観点からすれば矛盾であり逸脱である。カウンター・アーギュメントは、むしろ国際関係を階層秩序としてみなさない理論、例えば東アジアを勢力均衡システムの観点からとらえる視点に対してなされるべきではなかったのか?実際、今日の多くの研究者は、アジア地域への継続的コミットメントを表明しているアメリカと、急速に国力を伸ばしている中国との二極システムとして東アジアの国際関係を捉えている。

朴が提示する階層秩序の理論枠組みについては、他にも様々な疑問がわいてくる。まず第一に、一九五〇年代の

オーガンスキーのパワー・トランジション理論や一九七六年のクラスナーの論文に始まって一九八〇年代に大きな議論を呼び起こした覇権理論(コヘインの覇権安定論やギルピンの覇権循環論)等、これまでに存在してきた階層理論との関係はどうなっているのか?これらの理論においては、階層的国際秩序が生成され、維持されるロジックが明確に示されていた。しかし、朴の議論では、階層秩序の生成理由や、階層秩序における支配的国家が交代するダイナミズムについての説明が欠けている。

第二に、階層秩序はなぜ東アジアだけに限定されるのか?階層秩序がパワーの非対称性と地位の違いについての認識に基づいた国家同士の相互作用であるならば、そういった非対称の関係は世界の他の地域にも存在してきたはずである。例えば、戦後のアメリカとヨーロッパの関係も階層的にとらえることが可能である。ナポレオンがヨーロッパを席卷した時代や大英帝国の覇権下の国際関係はどうか?いかなる国家間関係においてもパワーの格差が存在するのであれば、なぜ階層秩序を東アジア独特のものとして著者が主張するのか疑問である。

第三に、東アジアに繰り返されると著者が主張する階層秩序の事例は歴史上二つしかない。一九世紀までの中国中心の階層秩序と、二〇世紀以降のアメリカ中心の階層秩序である。この二つの事例のみで階層性が東アジアに独特といえるのだろうか?また、中国を中心とする華夷秩序と戦後の日米、韓米の同盟関係とを同等の階層秩序とみなすことができるだろうか?華夷システムと現代の東アジアの国際システムは、階層性の繰り返しというよりは、前近代の国家間関係が近代国家関係に変遷したと解釈する方が妥当ではなからうか?さらに、著者の「東アジア」という概念自体も不明確である。そもそも、現在の東アジアにおける支配国として著者が考えているアメリカは、東アジアに属す国なのか?

議論の強引さがみられるもう一つの点は、階層秩序を受け入れる東アジアの国の例としてアメリカの同盟国である日本と朝鮮(韓国)のみを扱っている点、そして東アジアの国々の対外姿勢の多様性を考慮に入れていない点である。例えば北朝鮮は、支配国としてアメリカが君臨する東アジアの国際秩序を受け入れてはいない。中国は、アメリカ中心の階層秩序を受け入れるどころか、アメリカを東アジアの国際関係から排除したい意向が明らかである。階層性を受容しない国が東アジアに実際多く存在する点に鑑みれば、東アジアの国際関係のメカニズムは、依然として勢力均衡が支配的と考える方が妥当ではなからうか？

また日本と朝鮮(韓国)の対外行動や東アジアの国際システムにおける地位を同等に扱うのもいささか乱暴である。著者自身が第二章、第三章で描いているように、一九世紀における「西洋の衝撃」への日本の対応と朝鮮のそれとはまったく異なっていた。日本が西洋の国際社会に参入すべく急速な近代化と欧化を行ったのに対し、中国と陸続きで歴史的関係も深く、文明の中心として中国を敬っていた朝鮮は、そういった日本の対外姿勢を侮蔑していた。アジアの停滞を憂い、脱亜入欧を目指した日本と正反対の立場をとっていたのが朝鮮であった。実際、朝鮮が中国の朝貢国であったのに対し、中国から「化外の地」とされていた日本が歴史上中華システムの一部であったのはほんの一時期ではない。また、儒教の影響も日本と朝鮮では大きく異なり、支配者と被支配者を律する儒教の統治ドグマは、日本では朝鮮半島のように深くは浸透しなかった。日本と朝鮮を取り上げるならば、両者をむしろ対照的なケースとして扱う方が妥当ではなかったか？

ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」を意識して、朴は「想像の階層性」という言葉をこの著書の中で用いている。制度化された慣行としてアイデンティティーが再生産されるといふアンダーソンのテーゼに著者が

啓発されたことがここでは伺える。しかし、「階層性」は東アジアの国際秩序についての共有された認識でも制度化された慣行でもない。アンダーソンの「ネイション」が、現実と融合し、一般的に受け入れられる実体となったのに対し、「想像の階層性」は、朴の想像の域を超えざる理論にも実体にもなっていない。国際関係における国家間の表面的なパワーの非対称性の背後には、依然として勢力均衡のメカニズムが働いている。東アジアの国際関係を理解するうえで必要なのは、ウエストファリア以降の国際秩序の普遍的なロジックを深く認識することなのである。